essay

第2教授研究館（池内記念館）の思い出

関西学院大学商学部教授　阪　智香

私が第２教授記念館の研究室に初めて入ったのは、関学に奉職が決まった1998年のことでした。この建物は南側東部分が池内信行名誉教授の遺志と遺産によって造られました。そのため、皆この建物を、親しみを込めて「池内」と呼んでいましたので、ここでも「池内」と記したいと思います。

「池内」での思い出は尽きませんが、特に印象深いのは１年目（1998年）の３つのできごとです。

①初めて担当した講義は400人近い履修生のいた簿記でした。試験前に学生が研究室に質問に来ました。ひととおり説明すると、「わかりました！」と元気よく帰っていきました。翌日にはその学生が友達を連れてきて…どんどん人数が増えました。良く学び、楽しい学生たちでした。1年後、この学生たちはゼミに来てくれ、卒業後も長く付き合いが続きました。初年度の輝きの思い出です。

②初めてのゼミ選考の時期に、「トントン」と研究室のドアをノックする音。私「はい」。学生「谷口先生はいらっしゃいますか？」（谷口は私の旧姓です）。私「私です」。学生「えっ！」。大学教員らしからぬ若かりし日の思い出です。

③アメリカ、スイス、スペイン、日本をインターネットでつないだ国際会計の授業に「池内」から参加しました。日本のメンバーは、平松先生と大学院生（現経営戦略研究科の中島先生、国際学部の児島先生を含む４人）と私でした。研究室のインターネット回線を増強し、苦戦しながら４か国の教員と学生が同時双方向で議論し課題をこなすという当時としては画期的な授業でした。時差もあり、「池内」にほぼ終日６人が籠って取り組んだ濃密な時間でした。授業後、アメリカ会計学会に合わせて、アメリカの先生が４か国のメンバーをサンディエゴの自宅に招待して下さり、初めて皆に会えた時は感激しました。この授業は1998年のThe Joint AICPA（アメリカ公認会計士協会）/AAA（アメリカ会計学会）Collaboration Awardを受賞しました。「池内」から世界を経験した思い出です。

その後、「池内」で過ごした25年間に、多くの出会いを得ました。研究室で、学生の質問を聞き、卒論の指導をしました。大学院の授業も行いました。学生の相談や悩みを聞くこともありました。休日に研究室にいると、卒業生が子連れで寄ってくれたこともありました。「池内」は、ひとり一人の学生とじっくり向き合う貴重な場所でした。学生が、新しいチャンスに挑戦するにあたって背中を押したり、困難を克服するにあたって、参考にと自身の体験を話したり。「池内」での語らいをステップとして、学生が伸び伸びと成長していく様子は、眩しくもありました。「池内」は、学生が自分自身の旅の途中で寄港して、元気を取り戻し、次なる海図を得る場所だったのかもしれません。

そんな「池内」は、私にとっても、ほっと一息つける港のような場所でした。夕方、授業を終え、明かりの点いた北側玄関をくぐる時は、自宅に戻ったような安心感がありました。

「池内」が最も華やぐのは桜の時期でした。私が好きな景色は、２階の窓から見える桜の風景です。窓枠が額縁のようになり、玄関上の装飾とともにまるで一幅の日本画のような美しさでした（写真１）。

写真１　「池内」の窓からの桜風景は日本画のような美しさ

写真２　「池内」１階の気品ある談話スペース

「池内」の美しさを語る上で外せないのは、１階の気品ある談話スペースでした（写真２）。手前には、「真実の追求」のプレートが掲げられ、簾の向こうには、常緑の美しい中庭を臨むことができました。「池内」は、俗世間の名利（名誉と利益）から離れ、「真実の追求」をするにふさわしい場所であり、私にとって「心泰く身寧き処」でした（白居易『香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁』をふまえて）。「池内」を離れることは寂しいですが、引っ越し作業を終え、これまで四半世紀にわたって私の研究者人生を見守ってくれたこと、多くの大切な出会いを授かったことに深い感謝の念を込め、ここにお別れいたします。「ありがとう、さようなら」

（さか　ちか）